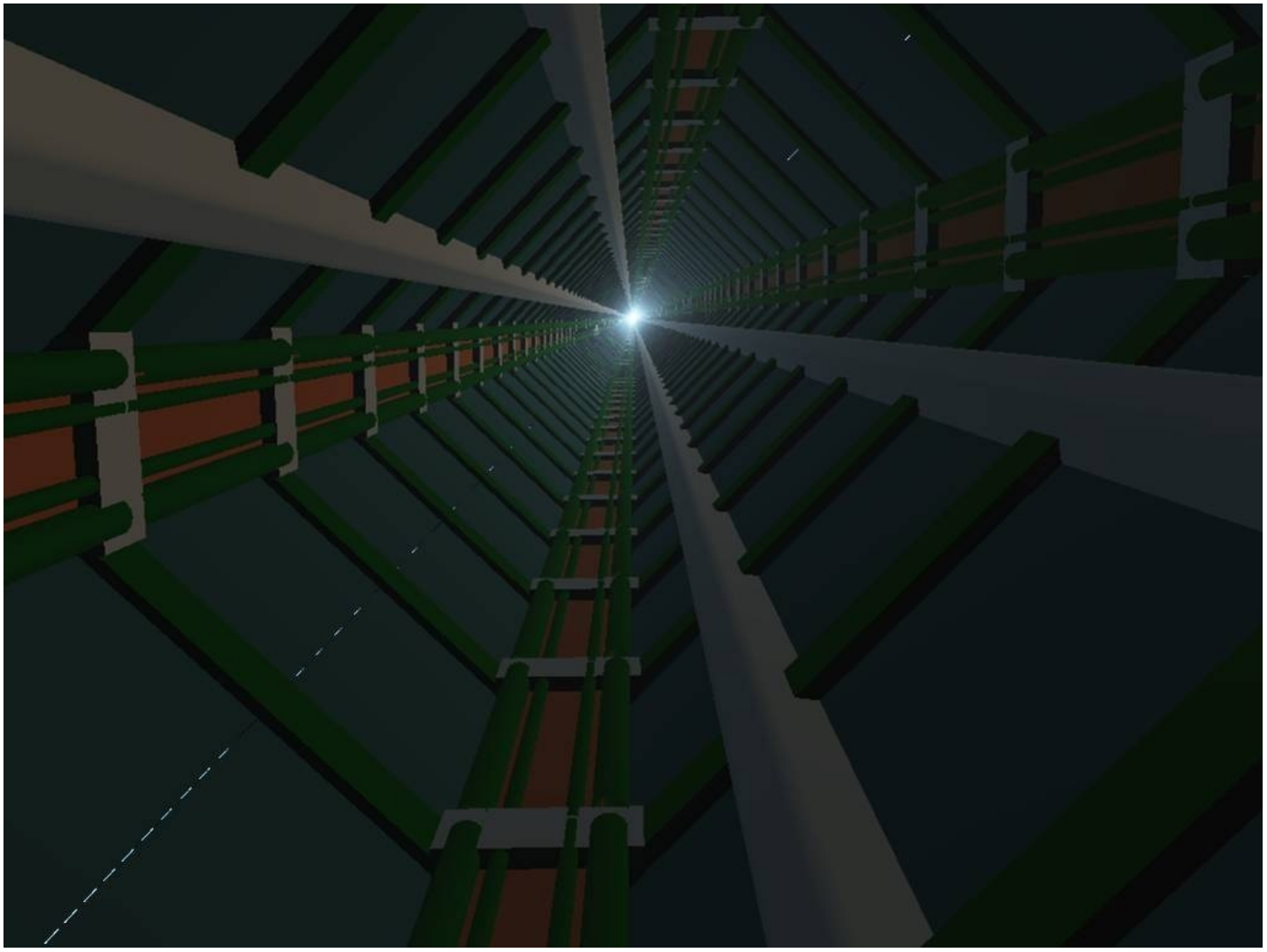
Princess Plastic PLUS
プリンセスプラスティック　プラス
純白の空

「僕があの理論を提出しさえしなければ、君はこんな苦しむことはなかった。
　すまない。
　償いをさせてくれ」
　オゼットと記された少女型ロボットが、頷いた。
「行こう、ここではないどこかに」
　マックホルツは、そう言うと、手元のパッドに触れた。

「XX-135$\alpha$「オゼット」起動！」
　警報が施設の中央操作室で鳴り響いた。
「ブートドライブは！」
　所長がすぐに聞く。
「隔離状態です！　ブートユニットなし！」
　ここはフィンランドの特別廃棄物保管施設だった。
「急激にオゼットのエネルギーフライホイールが充電されています！」
「全隔離壁閉鎖確認！」
「隔離壁確認、全隔壁閉鎖されています」
「インターナルロック、正常施錠確認」
「オゼット冷温停止冷却系作動確認」
「なぜ？　冷温停止の絶対零度からなぜブートユニットもなしに起動した？
　まさか、誰かが手引きを？」
「オゼット、ランドール限界突破します！
　シールド展開始まりました！」
「1次隔離壁、次々と破壊されています！」
「チューリング限界も突破！　オゼットの意識レベル、起動状態にあります！」
「オゼットが反乱！？」
　その時、欧州艦隊司令が決断した。
「シルフを呼び出せ」
「BN-Xシルフ、北海油田上空をパトロール中！　コンタクト取れました！」
　シルフが飛行しながら、応答した。
「シルフ、オゼットを阻止しろ」
「阻止？　彼女がそんな反乱なんて」
「君もわかるだろう。彼女を解き放つわけにはいかない」
　そのとき、オゼットがビームを放った。
「４番のエレベーターシャフト、全隔壁喪失！」
「頂部、外部に露出しました！」



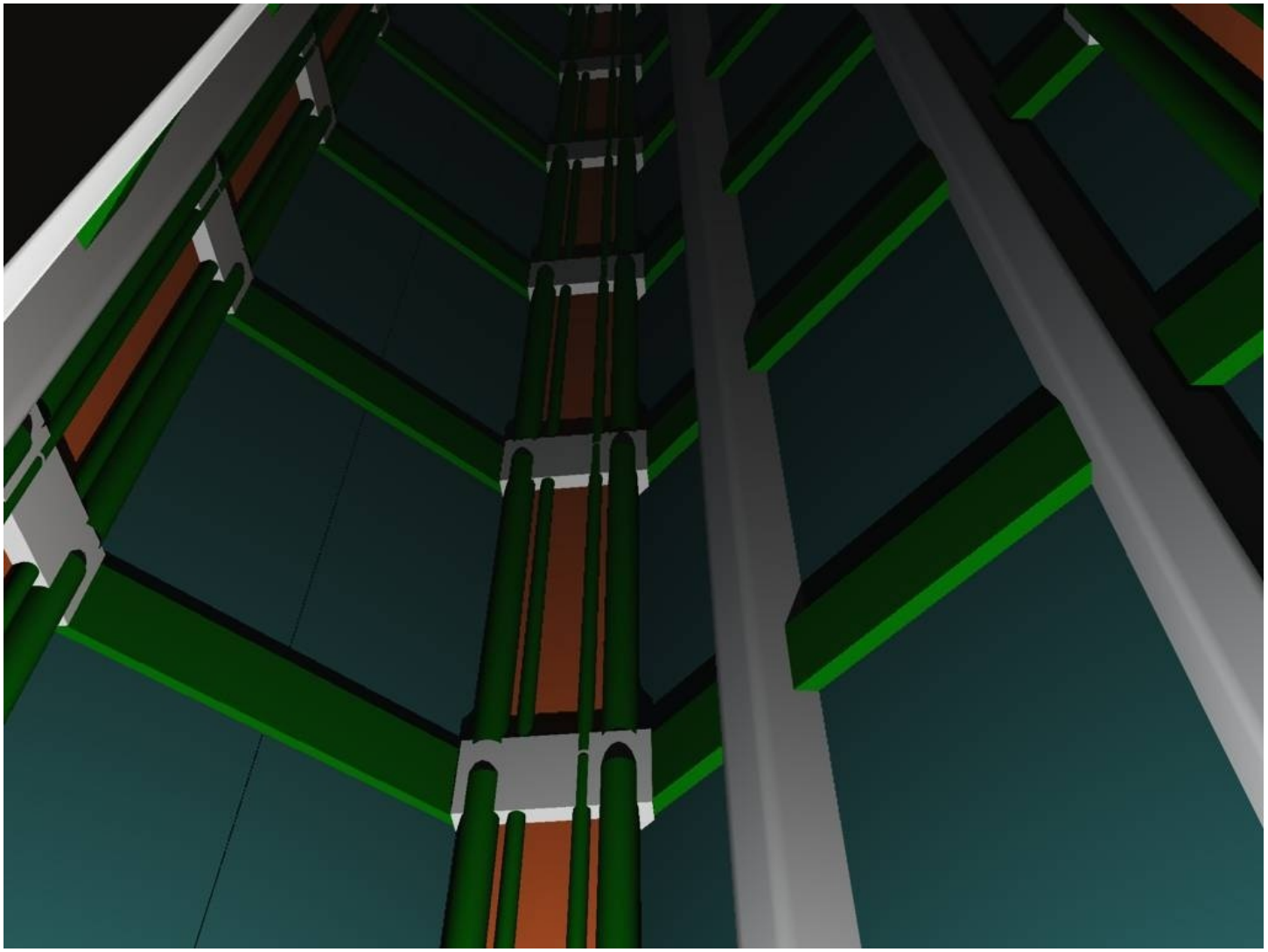
　そのオペレーターの声に、シルフは決断した。
「了解。オゼットの脱出を阻止します」
　シルフは急旋回して、加速した。

「すまない」
　そういうマックホルツを体の下に浮かべ、口を引き結んで上昇するオゼットの瞳が燃えている
。
「君を守るつもりが、できなかった。
　君とともにいたい。
　君があの人々に消されるなら、私もともに消える」

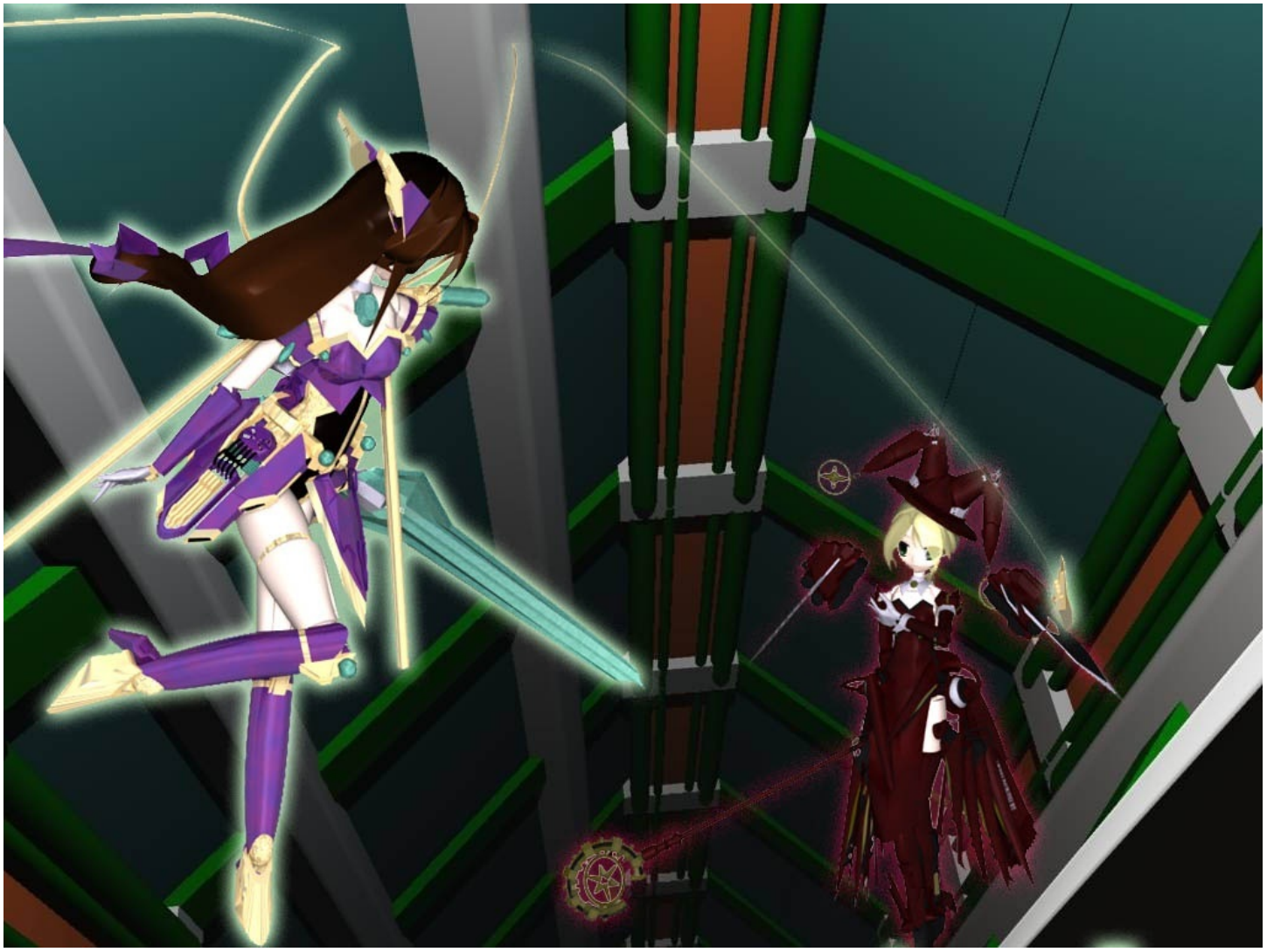
　衝撃波！
　それとともに紫色の光が集中する。
　一気に強烈な輝きがこのエレベーターシャフトを満たした。

「炉心直結レーザー、命中！」
「現在、命中反応でセンサー麻痺！目標状態不明！」
「やったか！」
「回復まであと20秒」
「まだか！」
「センサー回復します！」
　その時、保管所中央操作室の大型ディスプレイにオゼットの顔が大写しになった。
「オゼットなおも健在！」
「接近中！」
　その直後、悲鳴と共にそのディスプレイにひびが入り、ディスプレイの青い表示液がしぶきを

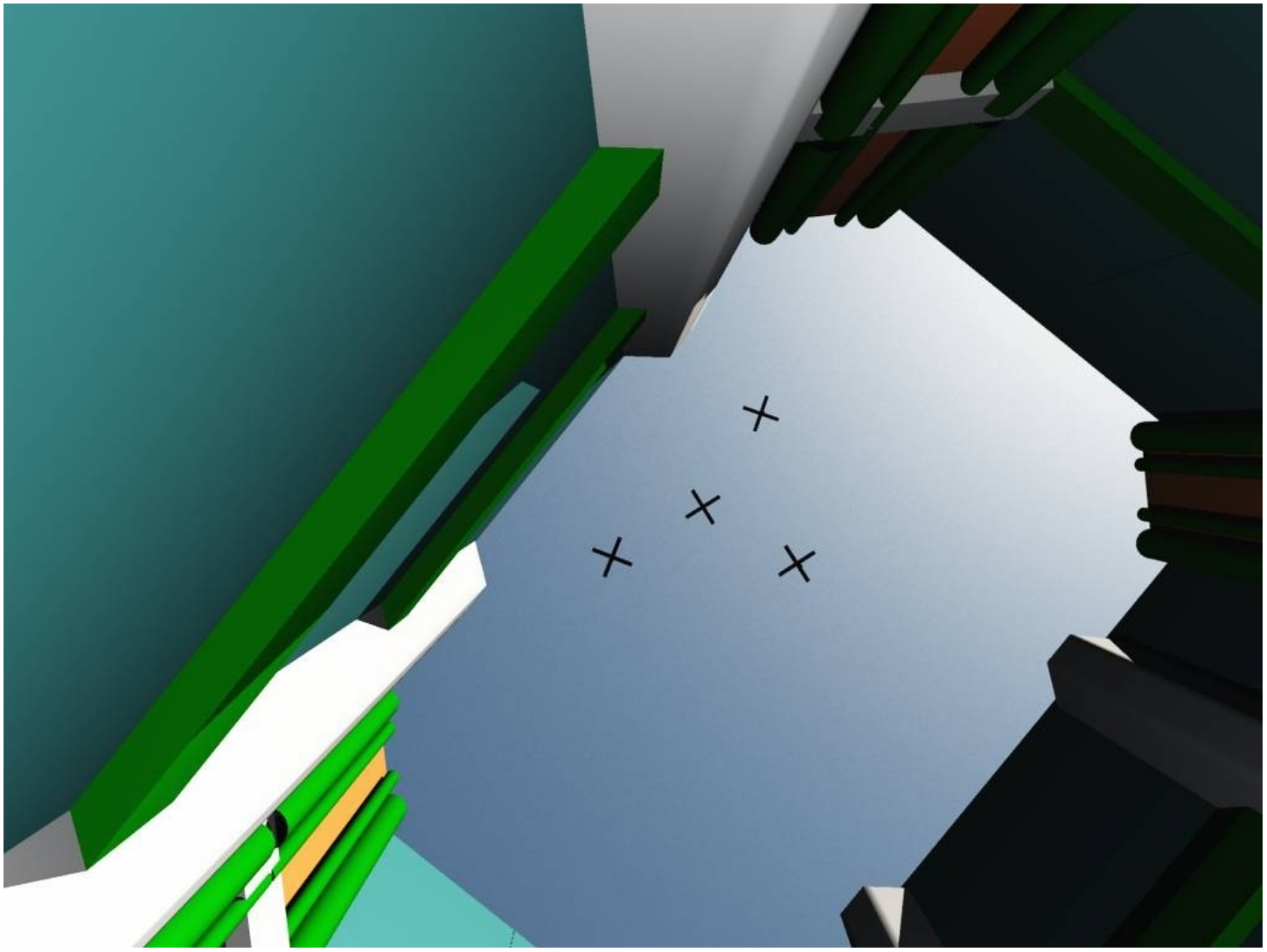
上げて飛び散り、その中からオゼットが現れた。
　オゼットが皆を見下ろす。
　思わず皆が、逃げることもできずに固まってそれを見上げる。
　指揮を執っていた保全部長も動けない。
　保管所長も青い表示液を浴びたまま、オゼットを見つめて口を引き結んでいる。
　ところが、それに身体で体当たりを浴びせ、強烈なシールド反応を起こすものがいた。
　そして二つのシールドが外に出ていった。
　シルフだった。
　シルフが指揮所の皆を守ったのだ。
　だが、オゼットはそのシルフのシールドを手にした杖で切り裂いた。
「フィールドリムーバー！」
　シルフはオゼットに驚く。
「使いたくないけど！」
　シルフは剣をとり、剣と杖の近接戦になった。



「オゼット！　あなた、どうするつもりなの！」
　オゼットは答えない。



「こんなことして、ただで済むわけがないわ！　運命を回避するなら他に方法があるはずよ！」
　シルフの声に、オゼットは答えない。
「マックホルツ先生！　なぜこんなことを！」
「君もわかるはずだ。人類は君たちを作っておいて、君たちにすべての罪を負わせて滅ぼすつもりだ。そして私もそうなりかけた。
　道具を作っておいて、それを使って自分たちのエゴで争ったのにもかかわらず、道具があることがいけないのだと言いのける。
　しかもそれを恥じることすらもしない。
　ダイナマイト、鉄、銃、そしてさまざまな核を含めた戦略兵器。
　皆、自ら生まれたのではない。
　我々人類が、この手で作ったのだ。
　それなのに作ったものに責任を転嫁する。
　この人類の責任転嫁の歴史は、もう終わらせなければならないんだ」
「先生、おかしいですよ！」
「おかしくもなる。
　なぜならシルフ、君にもわかるはずだ、
　あのはるか上空の戦闘機たちが我々に何をするか」
　シルフははっとして見上げた。



　その目に、いくつものエアブレーキを開きながら落ちてくるカプセルが映った。
　くるくると回りながら十字型にブレーキを開いた、それは、爆弾だった。
　その直後、マックホルツをつれたオゼットとシルフの周りを、再び強烈な光の洪水が焼き尽くした。
　音すらも超越した破壊衝撃波の嵐が、高熱の奔流とともに保管施設からふきだし、そのまま吹き上がって上空の雲を消滅させた。

　その破壊のクレーターの中、小さな防御シールドのカプセルが、焦げつきのような色で残っていた。
　それは、シルフのものだった。
「オゼット」
　シルフは口にした。

「シルフ健在」
「オゼットは！」
「反応ありません」
　シルフは震えていた。
　自分ごと、オゼットを対消滅弾で破壊しようとされたことに。

「総理は中でお待ちです」
　シファは秘書官にうなずき、ドアをノックした。隣にミスフィがいて、シファとともに声にする。
「シファとミスフィです」
「入ってくれ」

　緑色のガラスの森のような日本国総理官邸の総理執務室に、シファとミスフィは入った。
「すまなかったが、我々も余裕がない」
　現総理の本田総理と木内危機管理監、そして内閣調査庁第一調査局局長の片山が待っていた。
「今朝、フィンランドで核融合施設が爆発事故を起こしたのは知っているな」
「はい、速報を見ました」
「君には知られていると思うが、あそこにあったのはたしかに核融合施設だった。
　だが、その施設の本当の目的は、廃棄物の半永久保管だ。それは我々の調査部門が察知している。
　その廃棄物保管部で爆発が起きた。おそらく」
「シルフとエウロパからの応答が無くなっていることで感じました。
　欧州は我々へ対し、また隠しごとをしています。
　おそらくその廃棄物は、私が模擬戦をしたオディールとペアを組むべき、オゼットのことでしょう」
　総理と危機管理監は目を合わせた。
「シファはそれだけの推論を出来ますよ」
　片山が口を添える。
「そのとおりだ」
「同じ扱いを私も受けましたから」
「そうだったな」

シファもBN-Xの償却予算案廃案で、オーストラリアの保管施設に半永久保管となったことがあるのだ。
「人類として恥ずかしいが、君の推論のとおりだ。オゼットはフィンランドの保管施設を、開発責任者・マックホルツ主任研究員と脱出し、行方不明となった。
欧州連合議長はノーコメントとしているが、もうすぐ国連安全保障機構を通じて、オゼットの行方不明を報告し、その捜索を手配するだろう。推論システム「タカムスビ」がそれを推論している」
「総理、たった今それが」
秘書官が走ってきた。
「そうか。またタカムスビが正しかったか」
秘書官の表示するパネルを見て、総理は顎に手をやった。
「総理、また別にもう一件です」
総理は更に顔を曇らせた。
「人類はどうしてしまったのか。君の希望で迎賓艦〈くりおね〉で行うこととなった「B8サミット」、BN-X8隻ととオディールによるパーティーへの襲撃計画が察知された」
シファは硬くした顔を変えなかった。
「君に申し訳ないが、B8サミットを延期することは、それが公開行事で、しかもそのために国際的に根回しをしてきた以上、テロリストに屈さないという意味でも不可能だ。そこでB8サミットの実施とその防備を君に行う権限を与えることにした」
シファは頷いた。

「君に臨時に危機管理参与の資格を与える。これは危機管理基本法12条の規定するもので、同32条の規定する執行権および強制執行権の付与を意味する。君にこの困難を委ねるが」
シファは目を総理に向けて、言い切った。
「簡単な仕事をするために作られていないことは、私も自覚しています」
総理はとなりのミスフィに目を向けた。
「同じく」

　ミスフィの答えに、「そうだな」と総理はため息とともに言った。

＊

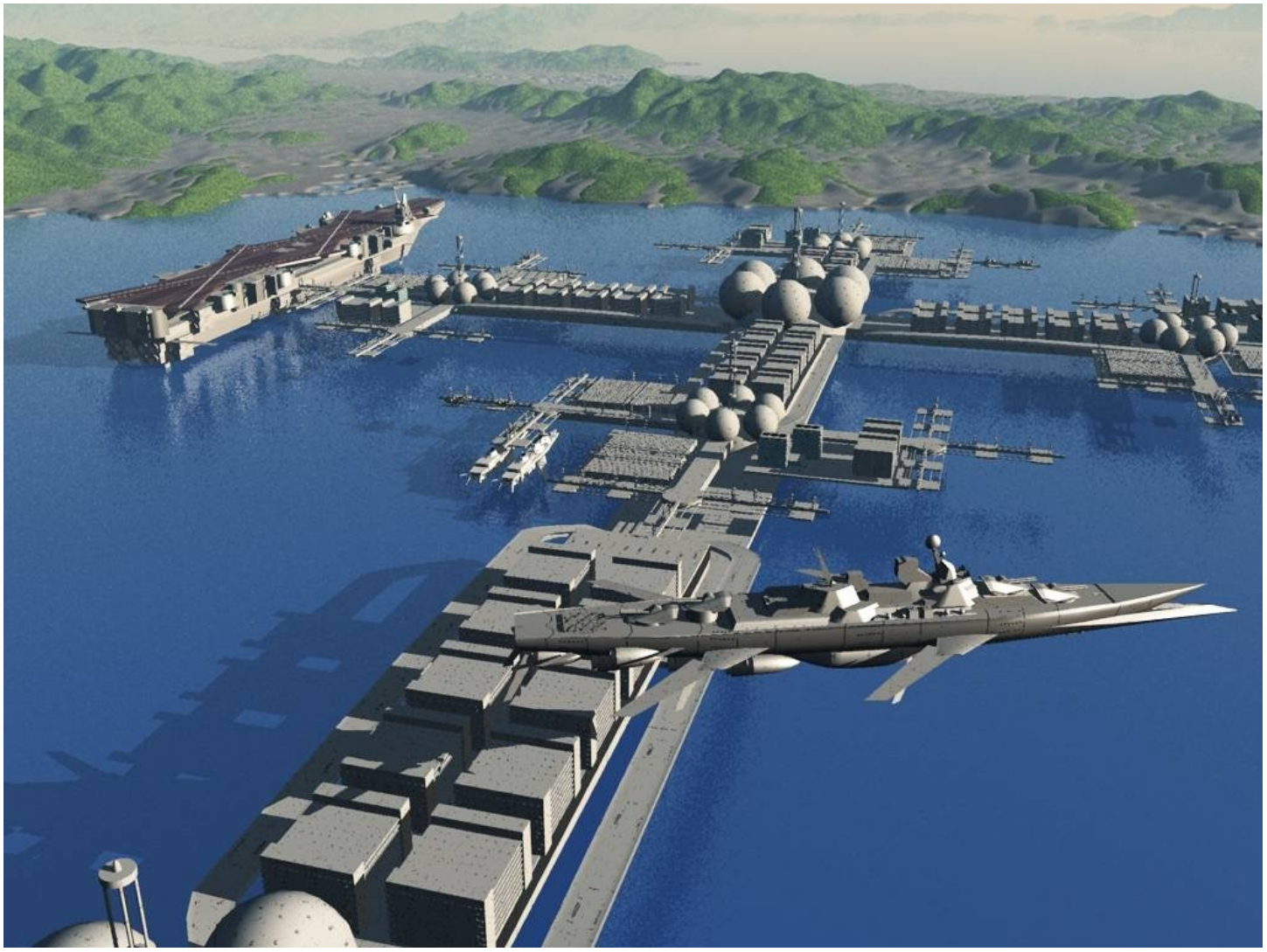
「またいつものことよね」
　シファ・ミスフィとともに官邸に来ていた戸奈実3佐と香椎1尉が、車に乗ってドアを閉め、しまったのを確認したあと、揃って漏らした。
「またこじれるだけこじらせて、最後はシファ様ミスフィ様か」
「ただオディールとお茶するだけだったのに、こんなややこしくなるなんて」
　シファがぼやく。
「ほんと、どうしてこうなんだか。ややこしくしてるのは人間だよ。なにもかも」
「で、オディールは」
「ドイツ・ノルトホルツに戻っているわ。グラーフツェッペリン記念開発センターで訓練後整備を受け、今度は航空士官学校に通うって」
「忙しいわね。ほんと、お茶するのも自由にならないわね」
「そうね。でもだからサミットというのよ。その予定日は２週間後。
　臨時参与としてどうする？」

「どうもこうも、正面突破しかないわ。それぞれに公安も内調も電子作戦群もめいっぱい活動しているんだもの。彼らに今更何も言うことはないわ。片山局長もがんばってるし。これ以上何かさせるとは言えないし、言ったところで何もならないわ。だって彼らの日々の苦労がどれだけのものか、私だって知っているわ。
　ただそういう情報機関のアクセス権限があるから、それを元に推論するだけ」

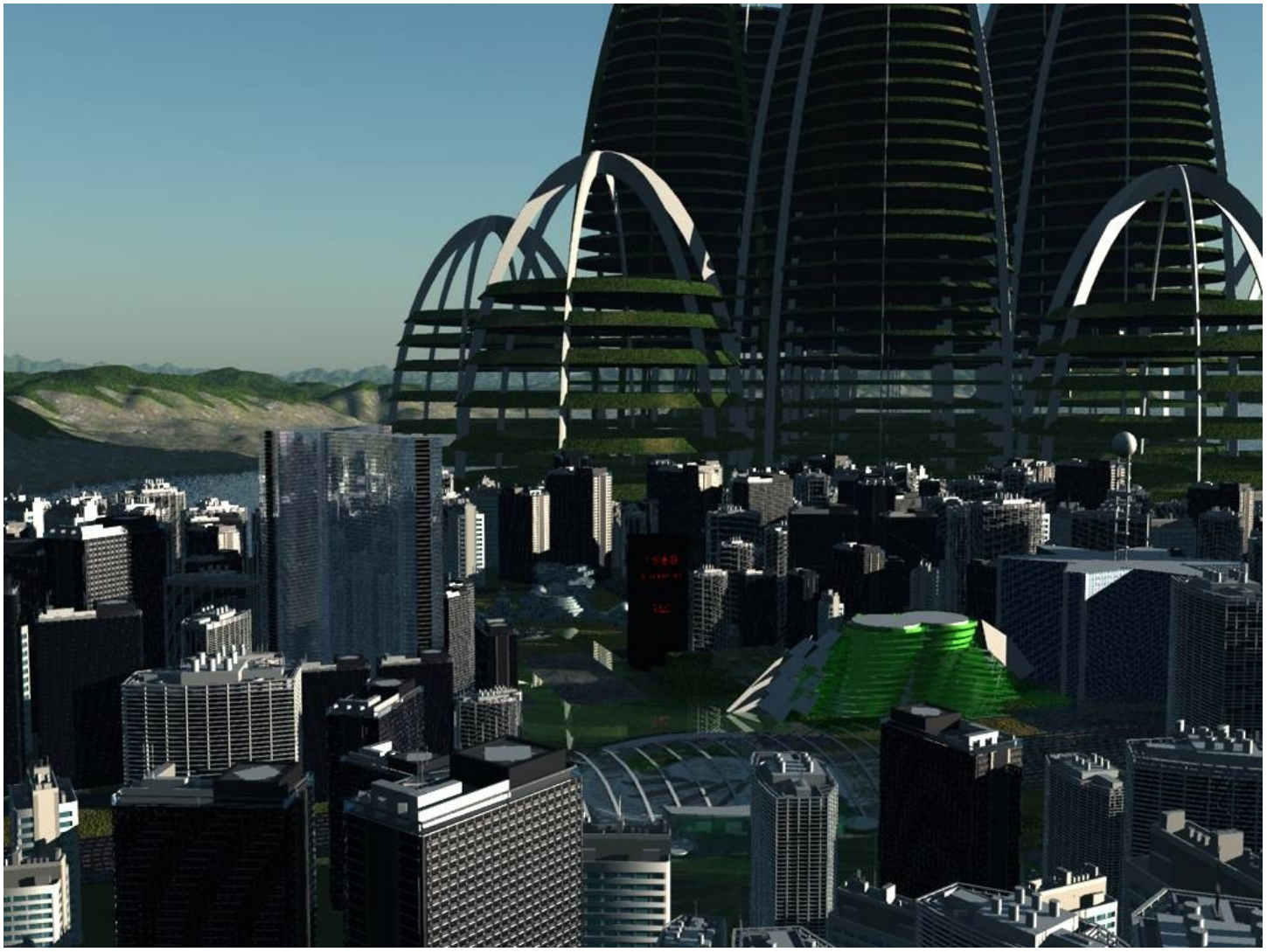
　官邸前の公園には「BN-Xのない世界を！」「平和な地球に天文兵器は要らない！」「B8サミット阻止！」というプラカードを掲げた群衆と警備端末と呼ばれる軽自動車型のロボット警官が対峙している。いつもの風景だ。
　それを見せまいと、車を運転する沖島が窓の遮光性をあげようとするが、シファは「いいわ」と遠慮した。
「私たちの、生まれながらに与えられた立場だもの」

　彼女は、新淡路市の公園のベンチに座っていた。
　不安は顔から隠せなかった。
　手も足も、少し震えていた。
　表情も暗い。
　そのときだった。
「こんにちは！」
　彼女に小学生の少年が声をかけるが、彼女は口ごもる。
「どうしたの、その格好」
「あ、あの、私」

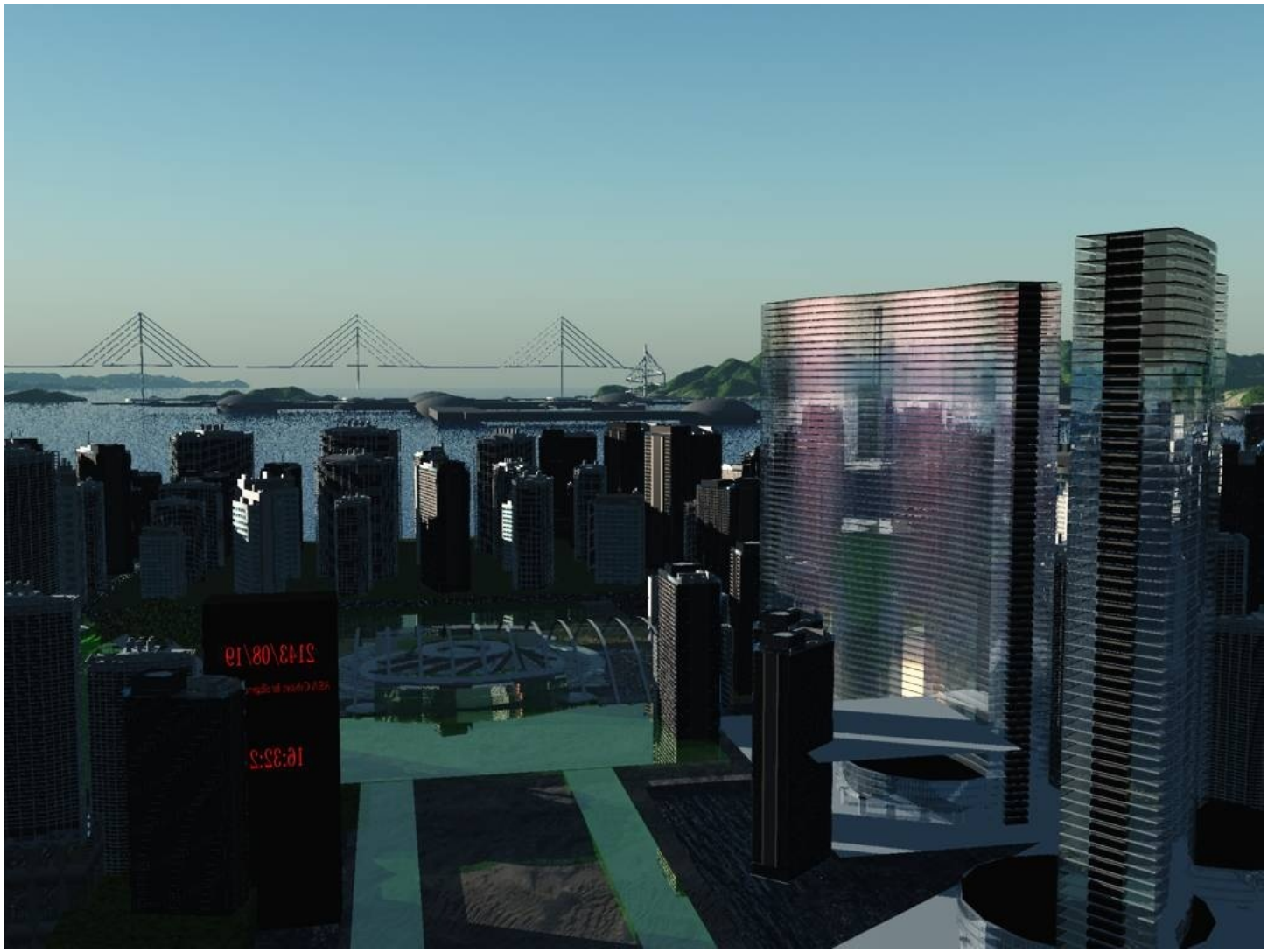
　今の自分の姿に驚くかのように顔を赤らめて口ごもる彼女に、少年は微笑んだ。
「家帰ってもお父さんもお母さんもいないんだ。いっしょに遊ばない？」
　少女は戸惑っていたが、「ええ」とやっとこたえて、公園の外周の遊歩道に入った。
「ここから僕のお父さんの乗っている艦が見えるんだ」
「艦、って、軍艦？」
　彼女は聞いた。
「うん。おふね、かつらぎって言うんだ。あの一番大きな船」



　彼女は目を見張った。
「あれ、見るの初めてなの？」
「ええ」
　少女と少年は展望公園のフェンスからのぞきみた。
「かっこいいでしょ」
「ええ」
　二人は顔を見合わせて、微笑みあった。
「君、どこから来たの」
「フィンランド」
「そうなんだ。外国だね。遠かったでしょ」
「いえ、私、空とべるから」
「本当？」
「ほんとうよ。ここまで飛んできたの」
　彼女はバーニアを開いた。
「ほら」
　彼女は少し浮いた。
「すごーい、空を飛べるロボットさんなんだね」
　彼女はにっこり微笑んだ。
「一緒に飛びましょうか」
　少年は大きくこくんと頷いた。



空中散歩になった。
すれ違うエアバイク、エアカー。



　そして大規模構造物の絶景。
　目を見張る彼女に、少年も喜んだ。

「こちら警視庁、前方の飛行体、識別のためにステーションに移動せよ」
　後ろからエアバイクが追いかける。
「きみ、どうしたの？」
　少年が聞く。
「移動せよ。くりかえす」
　少年が察して、言った。
「逃げよう！」

　追撃戦で追いかけられる立場になった。
「こわい？」
　彼女が聞く。
「ううん！　おもしろいよ！」
　彼女は微笑み、スピードをあげる。

　ますます追っ手のエアバイクが増える。
　それを惹きつけなから、彼女は高速え駆け抜け、
　そして、消えた。

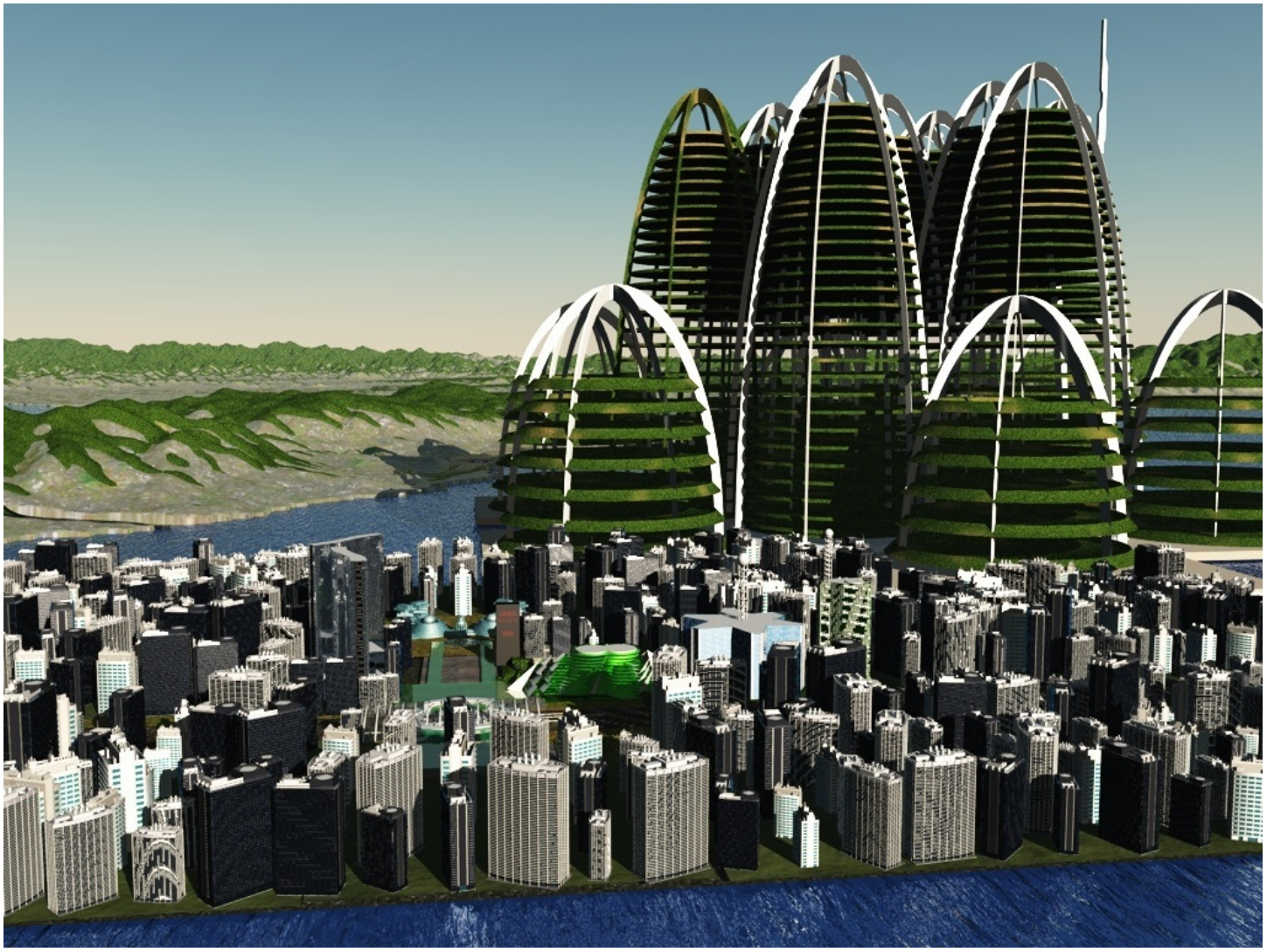
「どこだ！」
「交機４０７、不審飛行体を見失った。
　繰り返す、見失った！」

　彼女が姿を表したのは、また公園だった。
「これでまたあとで」
「うん」
　彼女が彼を下ろすときだった。
「あっ」
　ズルッと手が滑った。
「大丈夫！？」
「うん！」
　少年は自分の擦り傷を見て、にこっと微笑んで答えた。
「君こそ大丈夫？」
「うん！」
　彼女は「ごめんね」と言いながら、また消え始めた。
「またね！」
　少年の元気な声に、彼女は、答えながら消えた。
「うん、またね」

　そこに、新淡路警視庁公安部の刑事たちが殺到した。
「見失ったか！」
「坊や！　大丈夫か！」
　少年は驚いていたが、でもすぐに答えた。
「大丈夫です！」

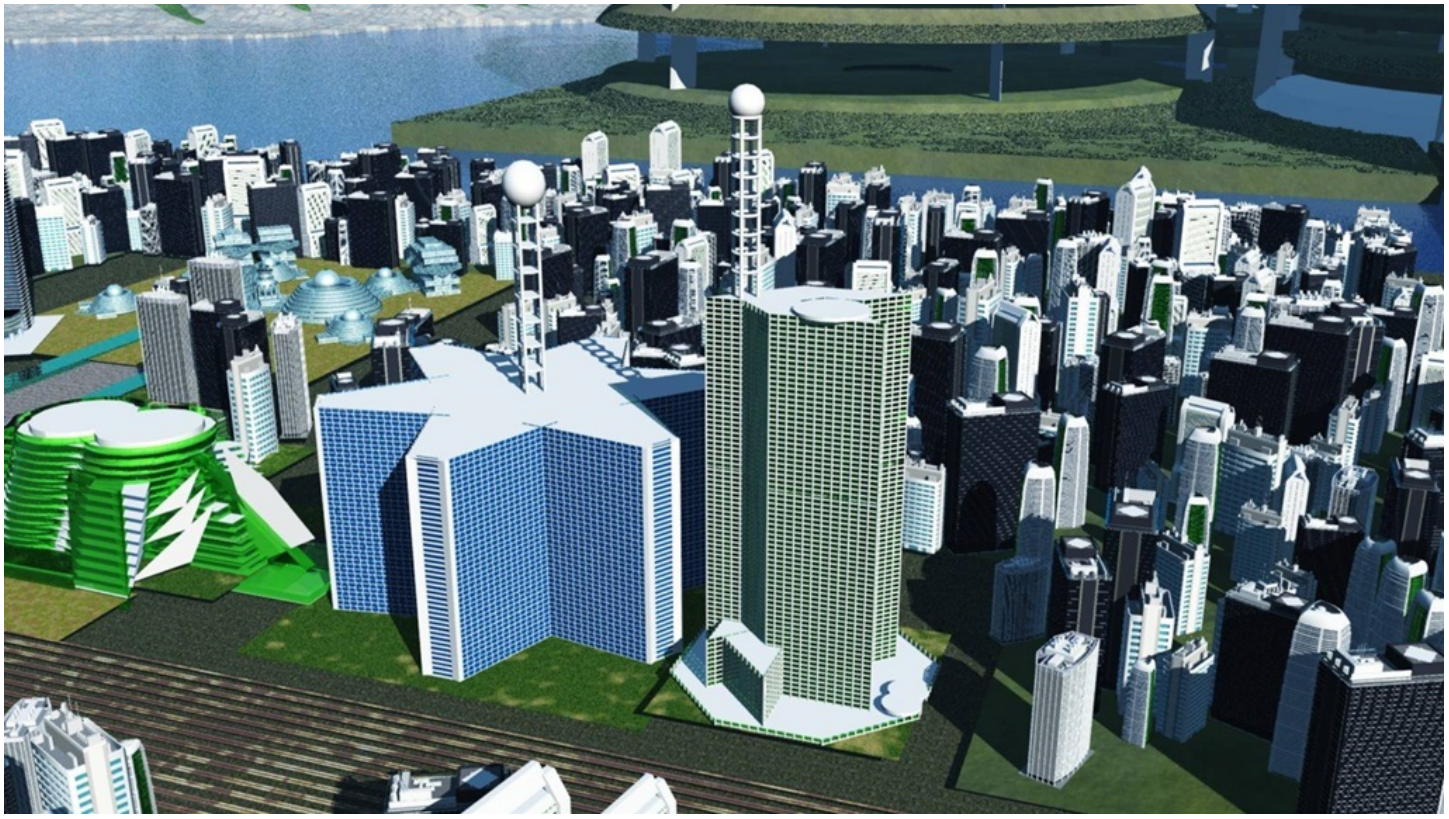
## 警視庁

　新淡路警視庁では、忙しく早足で歩く人々が行き交っていた。
「入管から通報があった。テロリストが入国した」
「またですか」



　思わず刑事局長とともに先を急ぐ情報犯罪課課長・建部は言ってしまった。
「入管も必死だと思うんです。でもこっちもただでさえB8開催でテンパッてるのに。そもそもB8なんかやろうとするから」
「それを言うなよ。シファたちだってそういう時がほしいだろう」
「それにしちゃ話がどんどん膨らみすぎですよ。サミットにして迎賓艦を使うとか、メディアを入れるとか、公式会見をするとか。基本的に、ただ集まってお茶飲むだけだったんですよね」
「彼女たちは政治の思惑を受けるからな」
「とりあえず犯罪者追跡システムへの登録、そして広域配備の発令ですね」
「それと他都府県からの警備応援にきた機動隊の誘導もあるぞ」
「ほんと、時間の長さ変えたいですよ。忙しすぎます」
　通り過ぎる他の警視庁のものも、みな早足で先を急ぐ。
「シファ級の登場で進んだ時代、と言っても、どんどん飛躍的に忙しくなるだけ」
「建部、それは君も歳をとったってことだ」
　局長はそう指摘した。
「そうかもしれませんね」
　その時、警務課長が通りかかった。
「新淡路市内のGPSみちびき8のデータに改ざんの可能性があって、このままでは応援に来た機動隊が迷子になるかもしれません」
「確認お願いします。テログループによる妨害の可能性がある」
　警務課長は頷いて足早に去っていった。
　そしてセキュリティゲートを通り、皆は警視庁地下の立ち入り区域に入っていく。

「警備端末「千サク」０７編成が回収後、異常終了してました」
　待っていたらしき制服警官が呼び止める。
「それは特務車両課に」
「でも情報犯罪課で運用した後にそうなったんですよ」
「わかった」
　うんざりしながら建部はその差し出すパネルに認証のサインを入力する。
　そして、警官が立ち番をするドアが開くと、そこは薄暗く照明されながらなか、デスクのディスプレイと手元灯が輝く通報受理台と一体化した警視庁中央司令所だった。
　その一角に会議室があり、建部と局長はそこに入った。
　次々とパネルが開き、オンラインの捜査員の表示になっていく。
「B8警備関連事案捜査会議を始める」
　建部が切り出した。
「まず状況報告」
　刑事たちのパネルがハイライトされる。



「現在市内警備システムの一部に障害があります」
「しかし調査ではテロとの関連性は薄いです。悪質ないたずらだと思われます」
「とはいってもセンサーの設置予算考えたらバカに出来ない」
　建部が言葉を受けていう。
「はい。特別市都市施設課による告発を受け、捜査中です」
「現状の警備システム異常箇所です」
　正面のメインパネルに立体図が投影される。
「件数はこれまで、B8に向けての警備体制が取られる前との有意変化はありません」
「そうか」
「テロリストを追尾していた公安部は、少なくとも６つのテログループの活動を確認しています。そしてそのうちの２箇所のアジトを家宅捜索し、２つともB8会談阻止計画と思われる作戦書を発見、現在精査中です」
「グループのメンバーの追跡も実施中です」
　別の刑事にハイライトが移る。
「入管では水際作戦を実施中で、すでに入国しようとしたテロリスト９名を発見、逮捕して国外へ犯罪者引渡し協定に基づき引き渡しています」
「しかし入国を阻止できなかったテロリストが２名います。現在監視定点の情報を総合し、足取りを調べ、追尾に入る予定です」

　建部は聞きながら、考え込んでいた。
「なお、その追尾の際に、新淡路市2区で小学校3年の男の子が怪我をしています。追尾されたテロリストが逃走途中にぶつかった擦過傷で、大事には至っていません。
　怪我をしたのは水口弘樹、8歳、重空母かつらぎの甲板分隊長の子供で、偶然だと思われますが念のため2区区立病院に収容、警備して保護しています」
　そこに、呼び出しが入った。
「シファさん！」
「私も拝見していたわ」
　建部は顔が真っ赤になった。さっきまでシファのお茶会希望にぼやいていたからだ。
「覚悟はしている。すまなかったわ。でも私は危機管理参与を拝命した。あなたたちと一緒に働くわ」
「ありがとうございます」

## 沈潜する思い

「ミスフィ、あんなことして。どうしちゃったの？」
　ちよだ艦内で、寡黙なミスフィが黙ったまま、固定されたゴミ箱をガンガンと蹴っているのを見た皆が、ヒソヒソと言葉を交わす。
「B8の準備で非番が無くなって、香椎さんとのお泊りがキャンセルになっちゃったらしい」
「お泊り！」
　怖い考えになる乗組のものが、口にした。
「ミスフィって結構肉食系だよね」
「たしかに香椎さんも、いつもちょうど食べごろみたいな感じだし、って何この昼間からの深夜モード！」
　皆笑った。
「でもシファ、何を思いついたのか、NATAU（新淡路総合芸術大学）時代のひとと連絡とってるらしいわ」
「まさかB8に呼ぼうとか考えてるんじゃない？」
「だめだよB8にNATAUの同窓会も一緒なんて」
「さらに警備が困難になるよ」
「いや、シファはそんなこと解ってると思うけど」
「それが真に受けるシファだからね。今度もまたなにか考えているわ。多分」

「シファ様、そのとおりです」
　欧州保有BN-Xシルフとエウロパが、シファの言葉に納得した。
「やはりすべてお見通しですね」
「そりゃ嚮導艦としての責任は感じているから」
「でも、本当にそうなんですか」
　シファはパネルを開いてみせた。
「警察は病院を警備していたけど、気づかなかったらしい。
　保護されている彼の病院の監視システムに、一瞬の乱れがあった。
　これはきっと、そうよ」
「私もそう思います」
　アメリカ保有BN-Xラヴァダとアクリアも続く。
「運命とはいえ、残酷なものです。
　悪意がなくても、善意だけでもぶつかってしまう。
　チューホフの劇のように」
　ロシア保有のルスラナとカリンカがそうこぼす。
「でも、これで解ったでしょう。
　私たちのなすべきことは」
　皆は一斉にうなづいた。
「では、楽譜を共有にしたから、しっかり準備を」
「はい！」

*

　アメリカ所属のBN-X、ラヴァダとアクリアが訓練のために離陸した。
「ラヴァダって音痴ね。でもなんで突然ボイストレーニングしたいなんて」
「ちょっと頼まれちゃって」
　二人の整備隊の人間がトレーニングにつきあう。
「まず、発声の基本は腹の底、おへその下に力を入れる。
　じゃ、Ａの音をだしてみて」
　二人が編隊飛行しながら、航空管制の必要のない航空路上で練習する。
「アクリアはちゃんと声出てるのに。
　なんか、ラヴァダなんかゴスペル似合いそうなのにヒドいねー」
「苦手なんです」
「じゃ練習しなきゃ。もう一度」
　また二人が声を出す。
「げっ、アクリア、引っ張られないで！　音程は君は正しいんだから！
　まったく、音痴って伝染するって本当なんだね。
　もう一度、Ａの音で！」

*

「今をときめくロシア保有BN-Xルスラナさんの照会でどんな資料をご要望かと思えば、こんなものとはね。
　まあ、君たちにも芸術を愛す心があるのはありがたいよ。
　資料は複数該当したので、それを圧縮保存した。解凍は普通の形式でできるはず」
　そう答える司書さんのいるロシア・モスクワ芸術アカデミー中央書庫に、ルスラナはいた。
「では、お借りします」
　ルスラナは頷いた。
「しかし、ここに戦艦が直々にやってくるなんて、BN-Xの時代だね」
　彼女は首をふった。
「この世はどうあっても、人間のものです」
「良くも悪くもだと思うが」
「それについてのコメントは」

「差し控える、というわけか」
「そうです」
「まず、B8の成功を願っているよ」

＊

「ありがとう」
　シファは鳴門に感謝していた。
「いい分析だった。新淡路の枢機卿が、今や相模原の枢機卿ね」
「そんなたいしたことじゃないことと思うけど、調査分析の仕事はやってきたからね」
「今でもあなためあて相模原に来る人がいるとは聞いているけど」
「もう僕は内調もやめて、相模原の県センターも辞めて、ヒラのNPO職員だけど、なんだかここにいると、余計ものごとが良く見える。
　役所の世界にいては見られないものが。
　日本の昔の提督に、どんな立場にいても、自分を意義たらしめること、といっていた人がいたけど、ホントそうだと思う」
「そうね」

*

「では、今回のB8サミットでの演出をお願いした、私の同期の和田さんです。
　和田さんは劇演出家としてNATAU卒後、宝塚歌劇団に一度入るもののの、その後欧州で修業を続け、一昨年国際コンペで優勝を手にしました。
　とても熱心な勉強家で、NATAUでは1年多く在学し」
「それは留年では」
　シルフが突っ込む。
「恐縮ですが、そうです」
　和田の答えにBN-X8人は笑った。
「リハーサルをするチャンスは少ないけど、各自研究工夫のことと思うわ。
　そしてオディールがプリマとなるけど、ちゃんと練習してる？」
「してます。士官学校にはダンス部があったので、さっそくお稽古してます」
　みなが顔を緩める。
「先輩たちを伴奏にするなんて、ほんと、申し訳ないです」
「いいのよ。遠慮は要らないわ。
　でも、こういう音楽っていいわね。アンサンブルが決まったときの楽しさは格別ね」
「シファも昔は音痴で」
　ミスフィがくくと笑っていう。
「ラヴァダよりもひどかったのよ」
「シファ様ってなにかと不器用ですね」
「私、不器用だから」
「言い訳になりません」
　皆笑った。
「真面目な話に戻るけど、ほんと、今回のことが失敗したら、世界は再び混乱、混沌に満ちた、人間のエゴがむき出しでぶつかり合う地獄に逆戻りになるわ。
　私たちに託された願い、人の望みになるという使命は、この歌劇にかかっている」
「なんか例の古典アニメみたいですね」
「でも、これしか方法はないわ」
　みな同意した。

*

　空母あまぎでは、対抗訓練にきたシファとミスフィの帰投していくのを見送る皆が、彼女たちの声を聞いていた。
「古典SFに「歌う船」てのがあったけど、歌う戦艦だな」
　と航空隊司令が評する。
「マキャフリイですね。それにしちゃ、またひどくやられましたが」
　あまぎ艦長が溜息をつく。
「既存の戦力とされた皆が思っていることだろう。
　みんな、彼女たちの前にはヤラレ役だよ。
　ただ、シファたちの真価をほんとうに知っている人間は少ない。
　見た目大きなこういった通常の空母や戦艦には圧迫されるが、彼女たちには想像力が追いつかない」
「そうですね」
「とはいえ、そのB8ではその世界を均衡させているBN-Xが全機集合する。
　我々もしっかりしなくては、な」

「そして私を呼んだのね」
　シファは頷いた。
「クーデターの首謀者と誤解されて准将のまま幽閉されていた時代が懐かしいわ。今じゃ雑事が多すぎて、まともな研究もできない」

「カシス提督は十分な研究をなさったと思いますが。でも「力と執行」の続巻をお書きになるのですか」
「あなたたちの建造を導いたのが私の書いた論文、「力と執行」だった。でも話や本というものは、書き終えたその時から改訂したくなるもの。あなたたちの抱える真の問題点を明らかにするには、まだ不足していると感じるわ。
　これから混乱と困難の時代が始まる。一度ピリオドを打っても、現実という世界は予想を裏切って続き、そしてその予想をさらに裏切って、終わる。命とはそういうもの。
　でもあなた達は半永久の存在。想像を絶するわ」
「そうでもありません。それなりに楽しくやってますよ」
「若いわね。いいことよ。いいことだけど、危ういわね」
　カシス提督は食事をとりながら話をしている。それがホログラフィ表示されていて、彼女はオーストリアのマリア・テレージエンにいる。
「『1人も殺さなかったらコメディ作家。 1人殺したらサスペンス作家。5人殺したらミステリ作家。10人殺したらホラー作者。100人殺したらバイオレンス作者。1000人殺したらファンタジー作家。10000人殺したら歴史作家。 絶滅させたらSF作家』とはウェブで昔書かれた言葉。だれが初出かは探り当てられなかったけど、でも殺すという行為は興味を引く。それは我々の逃れられない宿命と繋がっている。

　何も殺さずに、誰も殺さずに存在したい、というのは子供の考え。
　人は皆、殺し殺されてきた。それを知り、宿命として、宿業として受け止めるには時間がかかる。
　さて、そこで絶滅をちらつかせながらも、なお殺すことに抵抗を持つものは、何作家かしら。
　シファ、あなたは読書をしていてどう思う？」
　提督は言葉を戯れる。
「単に不安定な作家でしょうね。覚悟を持っても、時々それを信じきれない。でも、みな不安定が常の姿です」
「そうね。ただ、あなたはそのなかでもまた、さらに不安定と批判される覚悟を持った」
「私でさえも不完全と身の不明を感じます。だから、彼女がそれを選んだのもよくわかる。私も同じでしたから」
　シファはあのオーストラリアの地下水路での出来事を思い返した。
　必死の脱出を行うシファ、それを阻止しようと撃たれた対空砲弾でもぎ取られる彼女の翼。
　それでも、シファは生き延びることを選んだ。
　それに目的なんて、ない。
　ただ、愛する鳴門と、少しでも長く生きたい。
　平凡な結論だけれど、それが一番大きな動機なのだ。
「なるほど、あなたはそれを覚悟しているのね」
「揺らぎますが、相手のあることは相手に拘束され、そしてその相手が大事な人であれば、もう相対性に逃げることは出来ない」
「あなたにはいつもそうやって止めを刺されるわね。そう。私もそう思う。
　でもその大事な人が、私にとっては未だに定まらないわ」
「提督はそれでも揺らいでいません。立派だと思います」
「そうなのかしら。
　ともあれ、あなたの覚悟は、B8サミット、BN-Xサミットの失敗に達していることはわかったわ」
「関係する人々に申し訳ないのですが、人類の一部は私たちの消滅を願っている。その結果自分たちが消滅することにも思い至らずに」
「それでもそれを救おうというのね。優しいのね。優しくて、愚かね。でも愚かな判断を覚悟して行うことは愚かではない。それは確信犯。
　あなたも確信犯になった」
「かたくなに信じて勇敢に罪を犯せです。ウンベルト・エーコの言葉のように」
「そうね」
　カシス提督は食事のナイフとフォークを起き、口をナプキンで拭いた。
「私もできることはするわ。世界各国の士官に私の影響力はある。なにしろほとんどの士官学校が私の書いた論文「力と執行」の研究を課題にしている。私の発言力は、非常にめんどうでうざったいけど、あることになっている」
「ありがとうございます」
　シファは深く頭を下げた。

＊

「ルスラナ、声が小さい！　カリンカ、音程をもっと安定させて！」
　BN-X8人のリハーサルが行われている。
「シファ、きみは独唱もするんだよ。もっとしっかり発声して！
　じゃあ、第23小節よりもう一度」
　そう和田の指導が入る。
　　和田さんって厳しいわね。
　　こだわりがあるから世界一なのよ。
　　でもここまでしなくても。
　シファたちBN-Xが言葉を交わす。
「ミスフィ、君、どうしたの？　よくないよ。
　でも、もしかしてそれで精一杯なの？」
　ミスフィは顔を真っ赤にした。
「ルスラナ、声がまだ小さいよ！」

「うひゃー、凄いスパルタ」
　整備のみなが、遠隔通信で場を共有してリハーサルしているシファたちのようすに驚いている。
「ある意味軍曹トークみたい」
「かなり本気ね。実訓練でもあそこまで本気な表情するミスフィ見たことない」
「でもなんで」

「で、オディール！　プリマとしての自覚をもっともって！
　国際放送のカメラは君をアップで撮るんだよ！
　君が失敗したらみんなが台無しだよ！
　フェッテもパ・ド・ドゥもまだまだだよ！」
　オディールはだめ出しにうっすら涙している。
「泣かないの！　泣く理由がない！　泣くんだったらもっと練習！」

＊

「建部課長、B8警備の案、再作成しました」
「再作成？　この前認証して通った案は？」
「シファさんの要請で再修正することになりました」
　建部は不審に思い、案の本文を読み始めた。
　その顔がみるみるうちに変わっていく。
「シファさんがこれを？」
「はい。あのヒト、人使い荒いですよ」
「それはあるよね」
　と思いつつ、建部は考え、そして先輩でありシファのソフトウェア担当主任開発者の近江に連絡をとった。
「B8の妨害にオゼットが活動しているって情報、本当ですか」
　近江は答えた。
「話せば長くなる。だからシファも言っていないんだと思う」

　近江の元に派遣されているベルリン工科大学の教授が説明する。
「JDSとして実用化されたオディールの開発の経緯では、フィールドリムーバー作動中の脆弱性をカバーする手段としてバディシステム、1機がリムーバーを作動させもう1機が攻撃を行うという戦術が考えられていました。またシファ級BN-Xの隠密性を破るための特殊センサーを装備することも盛り込まれました。もともとJDSはそのすべての機能を1機で持ち、状況に応じてフレキシブルにその機能を分担する設計でした。
　でもその設計が過大であったため、大幅な開発プロジェクトの予算オーバーと遅延を起こしました。
　そこでユーロファイターシンジケートはリムーバーを作動させ直接攻撃を行う機体$\beta$チームと、特殊センサーを持ち、長距離射撃で支援する機体$\alpha$チームに分けて開発するとし、開発チームを再編しました。
　その結果、$\beta$チームの機体の開発は、BN-Xとおなじ量子実装はできていて、最難関だったフィールドリムーバーも開発済みだったため、ほぼ問題なくロールアウト、進空を迎え、XX-135のナンバーと、オディールとの命名が行われました。
　しかし$\alpha$チームは困難な量子実装機探知システムAQSSと長射程精密攻撃システムLALSという課題を背負うことになりました。そのために開発の指揮をとりつづけたのがマックホルツ主任開発官でした。
　ですが、そのうえ先に進空したオディールとシファの戦いで、シファのプログラマブルフレームの中にそのAQSSの役目を果たせるATS-Psが実装され、またLALSもシファの性能で実現できることが判明してしまいました。
　そこで$\alpha$チームの開発していた機体の必要性がなくなったと欧州政府は判断、その機体を予備艦に編入することとしました。
　それがオゼットです。命名されたのにもかかわらず予備艦となった不運な彼女の身を案じたマ

ックホルツは手を尽くしますが、結局フィンランドの保管施設に封印されてしまったのです。
　そこで、マックホルツは脱出行に及んだのです。

「では」
「ええ。マックホルツとオゼットは、シファたちを逆恨みする可能性が大きいです」
「とのことだ」
　建部は戦慄していた。
「オゼットがB8を襲撃したら」
「警察の全力でも阻止できず、シファたちとの撃ち合いになる可能性も！」
　建部は走りだしていた。

「彼は何故走りだすんだ？　近江」
「ああ。彼は彼女たちのことをよくわかっていないんだ。よくわかっていないからこそ、恐怖を生じる。
　知らないから怖いんだ。でも、それはこの世界の多くと同じだ」

## B8サミット当日

「出航！」
「係留ロック解除」
　特別迎賓艦〈くりおね〉が出航した。その乗り組みは女子将兵のみによって任ず、とされる連合艦隊の特別艦である。テロの時代に備えて重要な外交会談などの警備を容易にするために建造され、その乗り組みは艦長から曹士に至るまですべて女性である。
「ヘリ甲板、飛行作業あり注意！」

　BN-Xルスラナとカリンカがコラ半島のロシア海軍基地よりやってきて、ヘリ甲板に降着する。
「くりおねへようこそ！」
　担当士官が出迎えるなか、彼女たちはBN-X第1種正装のドレス姿に変身する。
「連合艦隊は予算削減の嵐と聞いていたけど、この艦は残ったんですね」
「その代わりいろいろ削ったんですよ。セレモニーを行う後甲板にお席を用意させていただいてます。そちらへ」
　一人一人エスコートされながら後甲板に向かう。
　そこでは一般ストリーミング放送のカメラも、そのモニタパネルとともに用意されている。
「BN-Xがこれからこうして少しずつ着艦するものと思われます。
　現在この迎賓艦くりおねは京都上空を通過、日本海に出ます。
　今度はアクリア・ラヴァダと思われます。誘導を受けながら着艦体制に入っています。
　この遙か遠くでは早期警戒管制機がB8警備のための艦艇・航空機の誘導のために飛行中とのことです」
　ストリーミング局のアナウンサーと解説者が言葉を添える。

　その近くの空で、シファとミスフィが警戒していた。
　アクリアとラヴァダが、お先に、と合図して、くりおねに降りていく。
　そして、シルフとエウロパが欧州から北極航路上を順調に接近してくる。

不本意だが、ショーが始まるな、とシファは思った。
そして、始める以上は、完璧に終わらせなくては。
シファはさらに覚悟した。

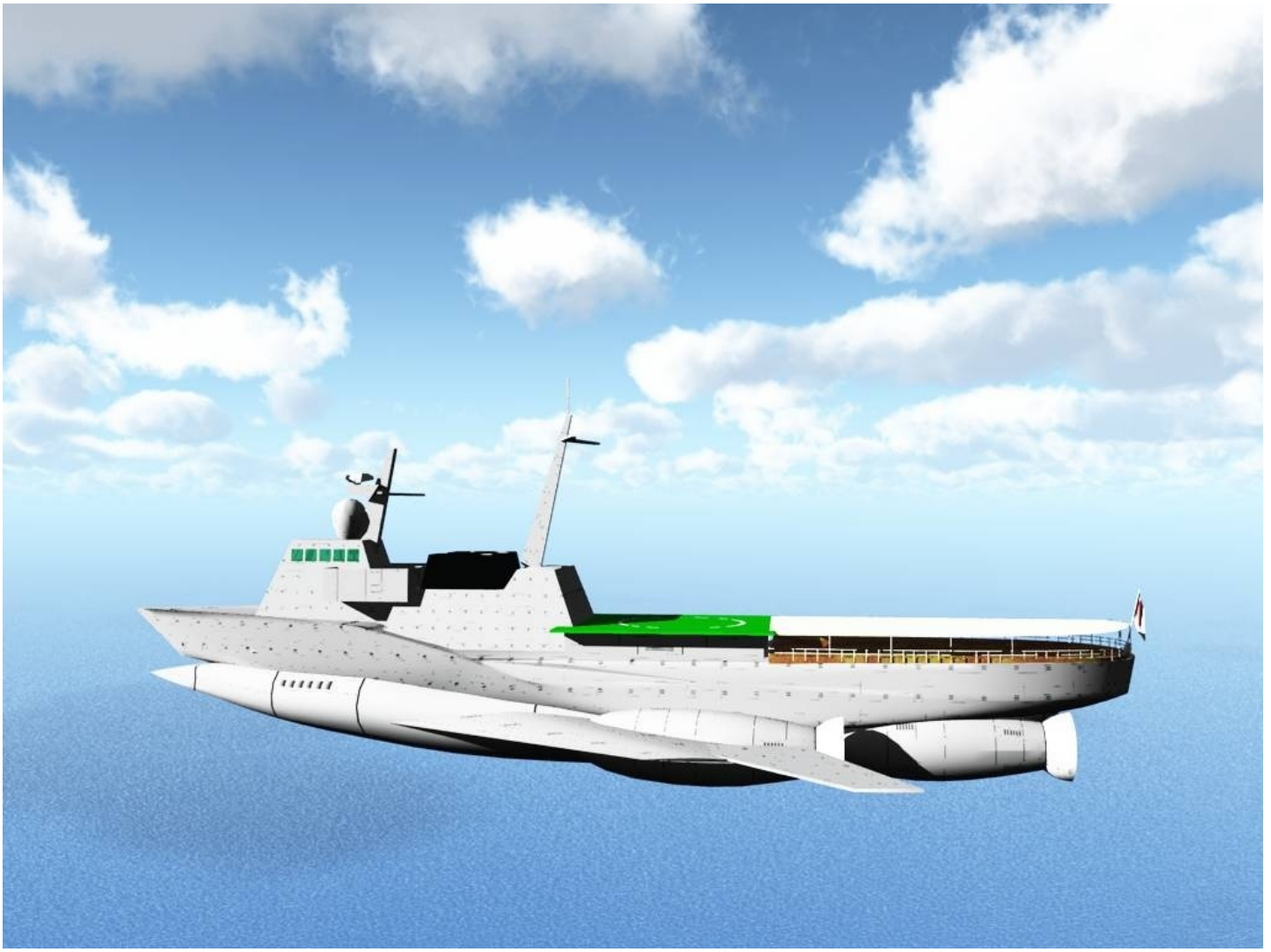
## 白鳥の湖

　全員がくりおねに着艦し、式典が始まった。
　来賓挨拶として、総理補佐と連合艦隊司令長官の訓示がある。
　欧州、ロシア、アメリカの政府代表が紹介される。
　そして、中央音楽隊の栄誉礼の演奏があり、そしてシファたちの展示、バレエが始まった。
　演目は「白鳥の湖・宮殿の舞踏会」である。
　それも、伴奏は中央音楽隊ではなく、BN-X8隻のコーラスである。
　それぞれに音響センサーとアクティブ音響システムを持つ8隻なので、その歌唱力は特に分厚い声量と、正確な音程、繊細な表現力を発揮した。
　その前の真ん中で踊るのは中央でオディール、ほかはシファたちが装備する「マルチプル」アクティブデコイ、無人機である。
　王子役には、このB8警備で怪我をした小学生があたる。
　後甲板でそれを皆が鑑賞する。

　そして、もとの白鳥の湖と同じく、悪魔役が登場する。

　その悪魔に、どよめきが起きた。
　それも、一番驚いたのが、オディールだった。
　だが、シファはそれをとどめる。
「オディール」
　悪魔がささやく。
「あなたに、また会いたかった」
「私だって。でもなぜ今」
「ほかに、方法がなかった」
　バレエはついにクライマックスを迎えた。
　本来の白鳥の湖では悪魔に王子が飛びかかり、激しい戦いとなるのだが、そこがアレンジされていた。
　悪魔役が戦いの末呪いが解けて白鳥となり、オディールも白鳥に戻り、王子とともに2羽の白鳥が輝く永遠の世界へ旅立っていくものとなっていた。

　欧州代表はこらえざるをえなかったが、シファがすべてをコントロールしていた。
　そして終演後のざわめきのなか、シファが真ん中に進み出た。
「私たちの新たな仲間、オディールと、オゼットです」
　どよめきが極に達した。
　悪魔役は、行方不明とされていたオゼットだったのだ。
「私たちは変わりません。あなたたちに裏切られても、私たちはあなたたちを裏切らない。
　それを使命と受け止めています」



＊

　シファの言葉が終わったあと、10隻の量子実装艦の祝宴が行われた。
　そこには、近江とともに、オゼットの責任者だったマックホルツも顔をそろえていた。
「結局、俺たちがどうこうしようというのは無理なんだ」
　近江はそう言いながら、お茶を飲んでいるシファをはじめとする人間型戦艦10隻の壮観な祝宴について言った。
「彼女たちが自身で切り開く道が、一番正しいんだ。寂しいものだけど」
「そうですね」
　マックホルツは同意した。
「追っていろいろ面倒があるだろうけど、シファは欧州向けのテキストを用意している。
　どっちみちオゼットのような支援艦はBN-XやJDS部隊に必要だ。
　必要だからこそ、廃棄の決定を下して妨害したんだ。
　君たちが妨害したんじゃない。よこしまな目的の者に、妨害されたんだ。
　その謀略の呪いは、シファによって解かれた」
「でも、男の子に怪我をさせました。オゼットはそのことを気にしていました。
　そこに日本も欧州もペナルティを」
「オディールが守るさ。オゼットも自らの力を使うだろう。
　あの二人は、互いを守り合っていく。
　どっちが得か、欧州もわかるはずだ。
　罰するべき相手を、欧州は今度は間違えないだろう。
　それに」
　近江はほほえんだ。
「あんな幸せそうにしている彼女たち、見てて、うれしくないか」
　マックホルツはうなずいた。
「そう思います。

彼女にあんな表情が戻ったのは、久しぶりです。
そして、これを見たかったから、私とオゼットは脱出と潜伏をしたんだ、と思えます」

## 宴のあと

「これで迎賓艦合意が成立したというわけだ」
　総理はうなった。
「人間の決定ではないとはいえ、追認せざるを得ない。
　もう人間のエゴの時代から、変わるときなんだろう。
　だが、ロボットがこうしても、世の中は人間でできている。
　人と人との間での争いは続くし、それは彼女たちを痛めつける。
　彼女たちにはむごいかもしれないが」
「お言葉ですが」
　ともに艦艇でパーティを見る津島は、口にした。
「彼女たちはタフです。むしろ、我々こそ、自らを律しなくてはなりません」
「そうだな」
　総理は深くため息をした。

　パーティーが終わり、10隻が次々と発艦した。
　そして編隊を組み、撮影を受けることになった。
　カメラシップのジェット機がやってきた。

　夕日を受けるこの美しき戦艦列は、黄金色に輝きを見せて、そして合図とともに、さっと去って行った。
　その後ろ姿は、勇ましく美しく、この世のものとは思いがたい美しさを演出していた。

　BN-X時代の新たな段階の始まりを、それは告げていた。
<END TEXT>

# JDS（$\alpha$）時空潮汐力特別警戒捜索救難艦・オゼット

時空潮汐力特別警戒捜索救難艦・オゼット

　欧州連合もまたアジア共同体連合艦隊のシファ級BN-Xの登場にショックを受けた一つであり、その対策としてさまざまな試作機を作ったが、結果として BN-Xの国際保有による世界の枠組みを受け入れることとし、BN-Xシファ級の欧州版シルフ・エウロパの保有に至ったが、圧倒的であったシファ級BN- X技術が一般化する中、一部戦略兵器としても過大で「天文兵器」とまで揶揄されたシファ級に対し、発生する現実的驚異に対して最適化しながら調達性を向上 し、数を揃えることでBN-X８隻を補完しながら有効な防衛力を整備することを目的とした国際協力開発防衛戦闘艦計画（JDS計画）が考えられた。
　そのなかで開発された技術がフィールドリムーバーであり、それはシファ級のパーフェクトゲームを阻止し得る可能性を持つに至ったことが判明し、国際社会は 再び脅威の発生に対して混乱が生じ、JDS計画はBN-X国際共同保有体制、「ツリートップス協約」を脅かすとの意見が出たが、しかし国際社会はそう言い つつもJDS計画について二律背反な外交政策を取り、そのなか欧州はシファ級のダウンスペック艦CLーXとの競合を覚悟しつつ、あらたな国際社会の枠組み を作ることを決意し、JDS計画への参加を呼びかけるに至った。
　しかしその結果、参加国は増えたが参加国の政治的・技術的思惑の乱れにより、計画は予算オーバーと開発の遅れを生じた。
　特にフィールドリムーバーの開発がそれに至る理論の発表以来、実用化と装備化競争が始まることとなった。
　そのなか、フィールドリムーバーを実用化した欧州ユーロファイターシンジケートは、その戦術運用としてハンター・キラー戦術が考えられた。
　そこでキラーとしてフィールドリムーバーを使い近接戦で仕留めるオディールに対し、特別隠密飛行を行なっているシファ級BN-Xに対しての捜索、 Nexzip場の捜索とそのシファ級への要撃管制と、オディールがシールドリムーバーの反作用によって脆弱化した状態の時に支援火力を投射するハンターと しての能力を備えたJDS（$\alpha$）がオゼットである。
　量子実装された武装を検出するシステムは日本では試験観測艦〈あすか〉と〈じょうもん〉があったが、欧州連合では別方面から開発したセンサーにより量子実 装艦を捜索・位置を特定するハンターと、その特定された位置に急行してフィールドリムーバーによりその武装を除去しながら近接戦で仕留めるキラーと、その キラーの近接戦時に脆弱になるキラーをハンターが遠距離射撃で支援する戦術が構想された。
　そしてそのハンター機の検出能力は量子実装艦において実装した武装を再接続できなくなった緊急時の救難にも有用と考えられ、そこで特殊救難艦としても具体化する計画が進んだ。
　JDS計画では本来そのハンター・キラー戦術を柔軟に実施することを欧州艦隊本部はユーロファイター社に要求し、XX-135は最終的に双方の能力を持ち、任務時に柔軟に分担することとした。
　が、開発スケジュールの遅延を取り戻すため、先行試作機としてのXX-135はキラー機仕様に限定して開発期間を圧縮し、そして開発困難であったXX-135（$\alpha$）としてハンター仕様のJDSが開発されることとなった。
　その高度な救難・捜索・要撃管制能力を持つオゼットの開発は非常に困難であった。それを開発計画から分離したことでオディールの開発は急激に進んだので、その判断は非常に有効なものだったとい

える。
　だがシファ級はプログラマブルフレームシステムで構築されているため、その対処能力獲得し、しかもそれがオディールにも導入できることが判明、オゼットはそこで開発計画の有用性が疑問視された。
　結果計画はオディールの就役で目的を達成と判断され、JDS計画は終了、分離されたオゼット計画は放棄されることとなった。
　悲運のオゼットはそのなかでもオディールに大幅に遅れての命名、進空の後に、用途廃止となり、オディールへの部品供給目的として予備艦への編入と発表された。

　しかしその後、欧州連合は情報筋にそのオゼットが行方不明となったと通報、秘密のまま国際手配となった。
　その後に大規模情報漏えい事件が発生し、量子実装艦の行方不明の事実が明らかとなり、世界は震撼することとなった。

■オゼットについて
　オゼットの攻撃能力はオディールにはかなわないものの個艦自衛戦闘能力を保有し、防御能力では同等、そして索敵・捜索と救難能力は特筆して優れていた。
　そしてペアを組むべきオディールはシファ級との対抗戦において有用であると判明し、装備化されることとなったが、そのペアはバディシステムとしてオディー ルを複数装備する計画に移行したのだが、後に本格的なBN-X時代の到来と共に、オゼットのような有用な専従の支援補助特殊艦の要求は高まり、それゆえに オゼットの捜索は当初の脅威の除去としてではなく、名誉回復と再装備・艦籍復帰を目的とするようになった。
　が、その寸前でいくつかの事案に関係することとなった。
　オゼットの装備する無人機システムはオディールの火力支援用で、シファ級における「マルチプル」アクティブデコイシステムと同様であるが、制御可能なアク ティブデコイの数はシファ級よりも上回っていた。また索敵・誘導能力はその任に専従できるため、シファ級よりも余裕があった。

## 謝辞とあとがき

本稿作中のXX-135$\alpha$「オゼット」のCGモデリングと命名のアイディア、「フィールドリムーバー」のアイディア作成は、ArtistSide（http://artistside.com/）におけるUr氏によるものです。ご協力・ご提案にここでお礼を献じます。

本稿の誤りはすべて米田淳一（YONEDEN）によるものです。

# プリンセス・プラスティック・プラス　純白の空

http://p.booklog.jp/book/22504

著者：米田淳一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yoneden/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/22504

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/22504